

グローバル時代のつながる日本語教育： ソーシャルネットワーキングアプローチ

當作 靖彦

カリフォルニア大学サンディエゴ校

要 旨

21 世紀のグローバル社会はテクノロジー主導の変化が続く激動の社会である。この複雑、予見不可能な社会を生き抜くために人間はこれまで必要であった知識、能力、資質以上の、また異なる知識、能力、資質を必要としている。それらを備えた人間を作るのが教育の役割であり、教育の一部を成す言語教育もそのような人間を作ることが要求されている。小論では、このようなグローバル時代を生き抜く人間を育てる言語教育のアプローチ、ソーシャルネットワーキングアプローチ (SNA) の目的、内容を議論する。このアプローチの学習目標である総合的コミュニケーション能力 (3 つの領域×3 つの能力+3 つの連携) の内容を示し、その目標を達成するためのプロジェクト型学習による具体的な教室活動の輪郭を示す。急激な社会変化が続く 21 世紀の社会では教育にも変化が求められ、また教育を担う教育者にも変化が求められている。SNA はそんな社会の要求に応えたグローバル時代の言語教育の新しいアプローチである。

1. VUCA ワールド

「教育とは今の時代を生きることが出来る人間を作ることである」と言ったのは教育学者の John Dewey であるが (McDermott 1981)、教育の一部である日本語教育も例外ではないだろう。日本語教育を通して、今の時代を生きることが出来る能力を賦与することが私たち日本語教師の任務である。このような教育目標を達成するためには、今の時代の社会がどのような社会であり、その社会を生きるために、どのような能力が必要であることを考える必要がある。

21 世紀の現在の社会はグローバル化が進行した社会とよく言われる。20 世紀とは大きく違う、テクノロジー主導の変化が激しい社会であるが、今の社会の状況をよく VUCA ワールドと呼ぶ。VUCA とは

Volatility (不安定)

Uncertainty (不確定)

Complexity (複雑)

Ambiguity (曖昧)

の頭文字をとったものである。もともとイラク、アフガニスタンで活動していたアメリカの軍隊が自分たちの置かれた状況を示すものとして作った語であるが (Stiehm & Townsend 2002)、現在私たちが生きる社会はたとえ戦争に関わっていないとしても、以上のような状況を呈した社会であると言われ、この言葉は教育でも使われるようになった。

インターネットの発達により誰もが簡単に情報を発信できる時代となり、世界中で発信される情報の量は未曾有である。そして、その中には Fake News と言われる正しくない、作られたニュースもあり、それが事実かどうかの正しい判断がなされなければ、人心が影響を受け、それにより社会の方向性も簡単に変わる時代である。Twitter、Facebook、YouTube などソーシャルネットワーキングサービスで発信される情報が、一瞬のうちに世界中に広がり、世界中で正式の情報と認められ、その情報で世界が動く時代である。このようなことは 20 世紀までは考えられなかったことである。

アーティフィシヤル・インテリジェンス (AI) の技術の発達はめざましく、2045 年には AI が人間の能力を超える「2045 年問題」が話題になっていたが、最近では、2045 年よりも早く、AI が人間の知能を超える時が来るだろうと予測が修正されている。それほど人間の予想を超えるスピードでテクノロジーが発達してきている。コンピュータ、ロボットが人間の仕事を奪い、2030 年には今人間がしている仕事の 80% がコンピュータやロボットによってなされるという予測もされている。2050 年にはロボッ

トが一家に一台という日も来ると言われている。無人カーも実現され、一般化するのには法整備を待つだけの状態になり、最近では、空飛ぶ自動車の開発の話が出て、昔 SF の社会でしか可能でないと私たちが考えていたことが自分たちが生きているうちに実現する時代になった。AI やロボットの技術の発展により、2075 年から 2090 年には、ロボットが自分で自分の会社の企画書を書き、自分で会社を作り、人間を社員として雇う時代が来るという予測もある。人間がロボットに支配されないように、ロボットの力を制限する法律が真剣に議論される時代である（當作 2014）。

平均的な人間の仕事はコンピュータ、ロボットに奪われるようになり、平均的な能力しか持たない人間はすでに生きていくのが難しくなってきたと言われる（Cowen 2013）。上述のように無人カーが一般化すると、運転手という運転免許さえあればできる仕事はなくなり、配達の仕事は無人カーやドローンに奪われることは想像に難くない。そのため、平均以上の能力、知識がこれからの時代は必要と言われる。しかし、飛行機のパイロットや航空管制官、新聞記者、会計士など特別な技術や能力が必要な仕事さえもロボットやコンピュータがする時代が来ることが現実化してきている。そのため、高校卒業資格はおろか大学卒業資格でもこれからは生きていくのは難しく、大学卒業資格プラス特殊な能力、知識が必要になると予測されている。平均的な能力しかない人間には生きて行くのが難しいのが VUCA ワールドの特徴でもあると言える（當作 2014）。

2. 21 世紀を生きるための知識、能力、資質

上述のような変化が激しく、予測不可能、かつ複雑な 21 世紀の社会で、生産的に生活を送るためにはどのような知識、能力、資質が必要かという研究が世界中で行われ、有名なものとしては、アメリカの 21 世紀のスキル（The Partnership for the 21st Century Skills 2002）、OECD のキー・コンピテンシー（Rychen & Salganik 2003）がある。2015 年にスイスのダボス

で行われた世界経済フォーラムでは、ビジネス社会、教育界のリーダーが集まり、21世紀を生きることができるといえる子供を育てるためにどのような能力を身に付けさせる必要かが議論され、次の3つのカテゴリーで16のスキルが必要であるという提言がなされた（World Economic Forum 2015）。

表1 21世紀を生きるために必要なスキル

リテラシー	読み書き能力、計算能力、科学のリテラシー、ICTのリテラシー、経済・金融のリテラシー、文化・社会的リテラシー
複雑な問題を解決する能力	高度の思考能力・問題解決能力、創造性、コミュニケーション能力、協働力
性格・資質	好奇心、率先力・起業家精神、忍耐力、適応力、リーダーシップ能力、文化的・社会的意識

未曾有の情報がインターネット上に溢れる時代、その情報を読み、また情報を発信するために書く能力はこれまで以上に重要となった。また、ビッグデータが広く活用される時代、統計学を含む数学の能力も重要なスキルである。テクノロジー主導の社会で、コンピュータ技術者、エンジニアが不足している今、科学のリテラシーを持った人間の増加が望まれている。また、コンピュータを使う能力、情報のリテラシー、メディアのリテラシーを持つことは日常生活でも必須となっている。経済が不安定で先行き何が起こるかわからない時代となり、自分の老後は年金に頼るのではなく、自分でめんどろをみないといけない世代には、経済・金融のリテラシーは必要な能力となってきている。自分の文化とは異なる人間と簡単につながり、日常一緒に仕事をしなければならない今、文化的、社会的リテラシーも必須の能力となっている。

20世紀には考えられなかった問題が多数起こる21世紀を生きるためには、複雑な問題を解決するために必要な能力、例えば、高度の思考能力、問題解決能力、創造性などが重要な能力となる。人間同士が簡単につながれる時代、言語を使ってのコミュニケーション能力もこれまで以上に重要な能力となっている。また、国境を越えていろいろな背景を持った人たちと協働で仕事をする能力も必要となる。

人間の平均寿命が延び、年金の支給開始年齢が上がったり、年金制度が廃止されたりすると、年をとっても仕事を続けなければならなくなる。いつになっても新しいことを学び続ける生涯学習能力が重要な能力となる。そのためにもいつになっても好奇心を持ち続けることが大切である。仕事が安定しない時代、自分で自分の仕事を作る起業家になる精神も重要と言える。どんなに努力しても成功するとは限らない VUCA ワールドでは、失敗しても起き上がる、不遇な時にもじっと耐え、チャンスを待つ、チャンスを作る忍耐力がなければ生きてはいけないであろう。変化が激しい時代、変化にすぐに対応する適応力も必要な能力である。協働作業でリーダーの役割を果たす能力も全ての人間が持つべき能力である。異なる文化背景、社会背景を持った人と円滑かつ効果的に作業するために高い文化的、社会的意識が必要である。OECD の研究によると、これからの社会を生きていくためには、この性格、資質がますます大切になってくると予想されている。

現在世界中の公教育では、教育改革が進行中であるが、その中で、21世紀を生きるための知識、能力、資質を賦与することが教育の最大目標となってきた。それぞれの教科の内容を教えることが一番の目標ではなく、教科の内容を媒体として 21 世紀のスキルを身に付けさせることが主たる目標となっているのである。上述のように世界に情報が溢れている時代には、教科の内容はインターネット上で簡単に手に入る。したがって、教育は教育を通してしか身に付けることができない、いわゆる 21 世紀のスキルを与え、21 世紀を生きることが出来る学習者を育てることを目標とすべきであるというのが現在の教育改革の方向であると言える（當作 2014）。

3. ソーシャルネットワーキングアプローチ

3.1 言語学習の理念、教育目標、学習目標

では、どのように言語のクラスで 21 世紀のスキルを身に付けるようにすべきなのか。現在の私たちの言語教育のアプローチは文法・語彙を教え、それを使い、外国語でコミュニケーションができることを目標としたアプローチで、21 世紀を生きることが出来る学習者を作ることはあまり視程にない。ソーシャルネットワーキングアプローチはグローバル時代を生きる人間を育てる言語教育のアプローチ（以下、SNA）として筆者により提案されたものである（當作 2014）。SNA はもともと筆者が中野佳代子氏とともに監修し、東京の国際文化フォーラムから出版された「学習のめやす：高等学校の中国語と韓国語教育からの提言」（以下、「めやす」）（国際文化フォーラム 2012, 2013）の中に示された言語教育のアプローチを、ほかの言語教育にも応用できるよう拡大発展させたものである（當作 2014）。

SNA では、「めやす」と同様、言語教育の理念、教育目標、学習目標として次のように提言している。

- 言語学習の理念：他者の発見、自己の発見、つながりの実現
- 言語学習の教育目標：ことばと文化を学ぶことを通して、学習者の人間的成長を促し、21 世紀に生きる力を育てる
- 言語学習の学習目標: 総合的コミュニケーション能力の獲得

言語教育の理念とは、自分の言語以外を使う人たちの言葉を学ぶことにより、その人たちについて知り、それを知ることにより自分のことをさらによく知り、そして、二者をよく知ることにより、二者をつなげる能力を開発し、さらにはつながりを実現させることであると定義している。そして、教育目標として、まさに上述の現在進行中の世界の教育改革の目標で

ある、21 世紀を生きることができる人間を育てるという人間形成をあげている。

SNA の根幹をなす学習目標である総合的コミュニケーション能力は、「言語」、「文化」、「グローバル社会」という 3 つの領域、「わかる」、「できる」、「つながる」の 3 つの能力と「学習者」、「他教科」、「教室外」という 3 つの連携から成る。3 つの領域と 3 つの能力は 3×3 のマトリックスを成し、それに 3 つの連携が加わる、3×3+3（スリーバイスリープラススリー）の全部で 12 の分野を言語の学習目標として設定している。これは次の表にまとめられる。

表 2 SNA の総合的コミュニケーション能力 (3×3+3)

	言語領域	文化領域	グローバル社会領域
わかる	自他の言語がわかる	自他の文化がわかる	グローバル社会の特徴や課題がわかる
できる	学習対象言語を運用できる	多様な文化を運用できる	21 世紀のスキルを運用できる
つながる	学習対象言語を使って、他者とつながる	多様な文化的背景を持った人とつながる	グローバル社会とつながり、社会に貢献する

+

学習者の関心、意欲、態度、学習スタイル	他教科の内容、既習知識	クラス外の人、モノ、情報
---------------------	-------------	--------------

3.2 総合的コミュニケーション能力

3.2.1 3 つの領域

コミュニケーションは「言語」能力があるだけでできるものではなく、多くの言語教育の指導要領、教育ガイドラインやスタンダードが主張するように、「文化」の能力もコミュニケーション能力発展には重要な位置を占める。これまでの言語教育のアプローチでは、この 2 つの能力の開発が中心となってきたが、SNA では、言語を使って社会活動を行うためには、社会に参画して活動するための能力、21 世紀で言うならば、21 世紀のグ

グローバル社会を生きるための能力、「グローバル社会力」とも言える能力が必要であると考え。このため、SNA では言語教育が与えるべき第 3 の能力として「グローバル社会領域」を付け加えた。「めやす」では、この 3 つの領域の重要性に関しては特に述べてはいないが、SNA では、この「グローバル社会」領域が「言語領域」と「文化領域」にかぶさるような形で重要な位置を占めると考えている。また、後述のように「グローバル社会領域」の能力を「めやす」よりも拡大している。

3.2.2 3つの能力

これまでの言語教育のアプローチでも、言語に関する知識を身に付ける「わかる」という能力目標と、その知識を応用し、現実社会で言語を使える「できる」能力を身に付ける能力目標があった。SNA では、これらに加え、「つながる」という関係構築能力の目標を言語教育の重要な目標の一つとして加えた。これは、グローバル化が進んだ現在の社会において、例えばインターネットを使って簡単に知らない人、これまでつながらなかった人、あるいは不特定多数の人とつながることができるようになって、コミュニケーションにより関係構築することがこれまで以上に簡単にできるようになり、その結果、コミュニケーションの様態のみならず、目的も大きく変化してきたことに由来する。21 世紀のキーワードは「つながる」とよく言われるが、「つながり」を作ることがコミュニケーションの大きな目的となり、そのために、ソーシャルネットワーキングサービスなどが多用される時代、言語教育が「つながりの実現」を大目標の一つとして掲げるのは当然のことであるし、それなしには、言語教育の意義が十分に達成されない時代に私たちは生きていると言っても過言ではない。デジタルメディアを使った英語の作文教育の研究で知られる Miller (2005) は人文科学の目的はつながりを作ることであると主張している。教育を通して、人間と人間だけでなく、人間と情報、人間と社会、人間とモノ、社会と社

会など多様なものの関係を作り上げ、人間として成長し、社会活動に加わり、社会を変えて行くのが人文科学教育の目的だとし、言語教育の目的も言語を使ってつながりを作ることであると主張している。

3.2.3 3つの連携

これまで述べてきた3つの能力、3つの領域の3×3を強化するものとして、SNAは3つの連携目標を挙げている。「学習者の関心、意欲、態度、学習スタイルとの連携」は、学習者の言語学習に対する関心、意欲を高めるように教え、学習を継続する態度を身に付けさせることを目標としている。教育の目標の一つは生涯学習者を作ることであるが、そのためには学習者の学習に対する動機付けを高めなければならない。そのためにも、学習者の関心を反映したカリキュラムを作る必要がある。私たちが日々のクラスで相対峙するチャレンジの一つに学習者のニーズ、学習スタイル、関心、興味の多様性ということがある。それぞれの学習者に対応する、例えば、区別化教育をすることによってこのような状況を克服していくことも言語教育が対応すべきことの一つである。

学習とは、これまで学習したことに新しい情報を付け加えて行くことにより、学習した内容を発展させ、さらに新しい情報を作り上げていく過程である。この過程においては、「既習内容や外国語以外の教科の内容」を基礎として、それに新しい情報を付け加えていくことが効率的と言える。また、これまでの外国語教育は文法・語彙と言うツールは教えるが、それを使って表現したり、発信したりする内容が教えられていないため、よく批判を受けてきた。その意味からも、表現、発話の内容となるよう、他教科の教科内容を利用して教えること、あるいはその内容を教えることを通して、内容中心に外国語を学習させることは、言語を効率的に教える方法としても有効である。「つながる」能力を開発する上でも、単にコミュニ

ケーションのツールとしての文法・語彙を教えるだけでなく、「つながる」ために使われる内容を獲得しておくことは重要なことと言える。

言語の究極的な目的の一つは、それを使って社会活動を行うことである。クラスの中に現実社会の社会活動を持ち込むことによって、言語を使って社会活動を行う能力を養うことができる。そのためにも、「教室外の人、モノ、情報とつながる」ことが言語教育の重要な目標となるべきである。教室活動を実社会と結びつくようにし、実社会で言語を使うように活動をデザインし、実施することが肝腎である。

3.3 3×3の内容

次に3つの能力と3つの領域のマトリックスについて少し説明を加えたい。

3.3.1 言語領域の「わかる」

言語教育の根幹と考えられてきた文法と語彙の学習が「言語領域」と「わかる」の交差領域である。この学習がない言語教育は考えられないが、この学習が言語学習の全てではないし、ほかの学習とは別格で重要と言うわけではなく、ほかの学習とともに重要である。また、この学習はいろいろな方法があり、文法書を読むとか、語彙を暗記するとか、講義で文法を学ぶという方法が全てではない。外国語の知識が入ることによって、母語を客観的に見ることもでき、母語の能力が上がることもわかっており、その意味でも「言語領域」の「わかる」は重要な役割を果たすと言ってよい。

3.3.2 言語領域の「できる」

この交差する領域の能力は言語を実際の場面で使用し、コミュニケーションする能力を指す。単に言語を知識として憶えるだけでなく、それを応用する能力を獲得し、実際のコミュニケーション場面で使えるようになる

ことが大切である。そのためには、実際にコミュニケーションを通して、言葉の仕組みを学ぶことが必要となる。実際のコミュニケーションの場面で能力を発揮できるように、実際の文脈、あるいはそれに近い文脈でコミュニケーションさせることが大切である。

3.3.3 言語領域の「つながる」

言語を使って、他者と積極的に接触、交流し、意義ある関係を構築することがこの交差領域の目標である。その実現のためにはいろいろな困難なことが起こることもあるが、それを克服して、他者を理解し、自己を理解し、関係を構築する能力である。「つながる」相手は、同じクラスにいるクラスメート、教師から、遠く離れてインターネットを通してつながる人であることもありうる。その状況により、言語能力を効果的に駆使し、「つながり」を作る能力を開発するのがこの領域の目標となる。

3.3.4 文化領域の「わかる」

言語を正しく使うためには、文化の能力を発達させることが必要であることは従来から言われてきた。文化領域と「わかる」能力が交差する領域は、学習対象言語が使われる文化に関する知識を学習する目標を示す。これまで、言語と文化を切り離し、文化事象、文化項目を別途教えることが多かった。しかし、このような文化の教え方は文化のステレオタイプを生みやすいし、文化知識がばらばらに入り、総合的な文化知識とはなりにくかった。個々の文化事象、文化項目を教えていくよりも、学習者が自分で文化を発見し、文化事象を学んで行く方法が望まれる。現在のようにインターネット上にあらゆると言っていいほどの情報が存在する時代には、情報の獲得の方法も変化しており、メディア、テクノロジーを正しく、適切に使うことによって文化を学習することが可能になってきているし、むしろそのような学習方法のほうが効果がある。

3.3.5 文化領域の「できる」

コミュニケーションを円滑に行うためには、文化背景をしっかりと知ることが大切であることは言うまでもない。文化的に適切な挨拶ができることから、話題にしていいこと、悪いことを判断し行動する、日本語ならば、正しい敬語を使う、場面に文化的に適切な言語を使うなど文化の知識を実際場面に適切に応用することまで、文化知識の応用能力はコミュニケーションを円滑に行うため、人間関係を作り、広げていくためにも必須である。

3.3.6 文化領域の「つながる」

異なる文化を持つ人間が接触、交渉していれば、当然のことながら摩擦や誤解が生じるものである。それを乗り越えて、よい人間関係を作っていくためには、文化の背景を知り、応用できるだけでなく、場面場面で文化の違いに対処していく、さらに高次の文化能力が必要となる。文化というのは静的なものではなく、時代によっても、同じ文化を持つ地域間によっても異なるものであり、そのダイナミズムを理解することが人間関係構築の第一歩となる。異なる価値観がぶつかりあったり、異なる経験、関心、態度が複雑に絡む異文化交渉で、共通の価値観を創造したり、思考を調整したりしながら、他者とつきあって行く能力を発達させるのがこの目標である。

3.3.7 グローバル社会領域の「わかる」

第1章で述べたような複雑な21世紀のグローバル社会を生きて行くためには、今この世界でどのような問題が起こっているか、また将来どのような問題が起こるであろうかを知ることは重要なことである。また、それらの問題を解決するために自分でどのような知識、能力、資質を持っているか、それをどのように身に付けられるかを「わかる」ことが今求められている。

3.3.8 グローバル社会領域の「できる」

上述のように 21 世紀のグローバル時代を生き抜くためには、21 世紀のスキルを身に付けることが必要とされている。第 2 章で述べた 16 のスキル全てを身に付けるのがこのグローバル社会領域と「できる」の交差点領域の目標である。「めやす」では、協働力、高度思考力、情報活用力の 3 つに限っていたが、SNA では、それをさらに拡大して、21 世紀のスキル全部を身に付けることに目標を拡大している。

3.3.9 グローバル社会領域の「つながる」

言語を使い、ローカル社会、地域、国、グローバルレベルで社会活動に参画し、社会を作り、社会を変えていく能力を身に付けるのがこの交差領域の目標である。グローバル社会に貢献し、社会を良くし、存続可能な世界を作る能力を身につけることであり、SNA はこの領域の「つながる」目標を言語教育の究極的目標であり、言語教育で一番重要な目標と考える。

4. SNA の目標達成のために

SNA の目標とは、様々な授業活動、学習活動を通して、以上述べた 12 の目標をまんべんなく達成することであり、最終的に「グローバル社会領域」の「つながる」までができる人間を作ることもある。SNA は、教育活動は存在論的なものであり、教師と学習者の接触、あるいは学習者と学習場面の接触は一回性のもので、それを理論化することは難しいと考える。従って、総合的コミュニケーション能力の 12 の目標を達成するための決められた方法はないと考える。それぞれの教師がそれぞれの場面、環境で一番最適の学習が起こるように最適の学習方法をデザインすることが重要であり、全ての教師はデザインシンキングの能力を持つべきであると考える。とは言え、最近の社会構築主義（社会構成主義）が主張するように、社会活動や協働活動は言語習得を促進することや、学習者が学習の中

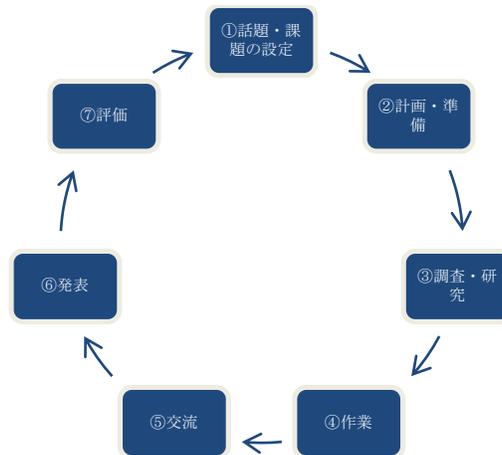
心になる学習者中心、さらには学習者主体の方法は従来の、例えば、教師中心の方法よりも言語習得をより効果的に進め、12 の目標をより効果的に達成する最適条件を作ると考える（當作 In preparation）。

また、言語学習の効果的な実現のための要素をいろいろ含んだ、例えば、プロジェクト型学習（PBL）は 12 の目標を達成する方法としては非常に有効と考える。

PBL は図 1 に占められるような過程を通して行われる。まず、解決しなければならない課題を与え、グループで協働作業を行い、それを解決し、解決方法を提示し、最後に自分たちの活動を評価することで終わる一連の過程を通る。

課題が与えられたら、それをどのように解決するかグループで話し合い、解決策を出すための計画を立て、それに基づき、研究の準備を行う。様々な資料に当たったり、資料を集めたりし、調査、研究を行う。必要によってはアンケート調査、オンラインサーベアをしたり、問題解決のための作業をしたり、グループで手分けをして、各種の作業を進める。また、クラス外に出かけたり、クラス外の人と交流したり、クラス外のモノ、情報と交流する。問題解決作業が終わったら、結果を発表する。発表は口頭によるプレゼンテーションの場合もあるし、レポートを書いたり、ブログを書くこともある。ポスターを作ったり、写真や絵のコラージュを作ることもできるし、寸劇をして結果を見せることもできる。メディアをうまく使い、できるだけ広く発信して、自分たちのしたこと、自分たちの考えを多くの人に知ってもらおう。その後、自分たちの活動を振り返り、発表も含めて、自己評価をしたり、ほかのグループの結果を評価して、一連のプロジェクトの作業を終える。

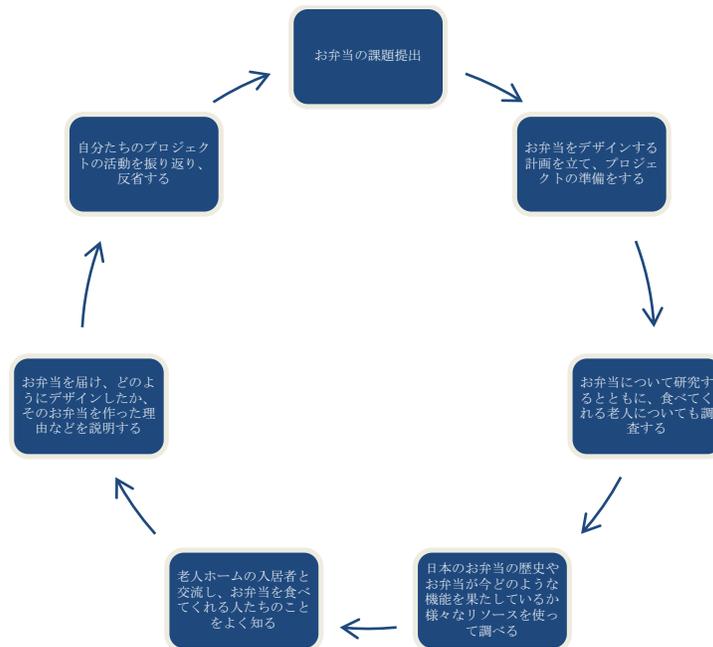
図1 プロジェクト型学習(PBL)の過程



ここでは具体的な例として、筆者が自分のクラスで行った「お弁当プロジェクト」を紹介する。これはもともと 2012 年に「めやす」の監修者の一人でもある中野佳代子氏がデザインし、東南アジアの高校で日本語を学ぶ学生たちを対象に東京で実施したプロジェクト（中野 Unpublished）を、サンディエゴという環境で、さらにアメリカで日本語を学ぶ学習者を対象者として実施できるように筆者が改編し実施したものである。サンディエゴにある日系の老人ホームの入居者のためにお弁当を作り、届けるというプロジェクトである。入居者は 70 歳を超えた日系人、日本人であり、中には老人病を抱える人もいて、食餌制限のある人もいる。そのような中で一番合ったお弁当をデザインするというのがプロジェクトの目的である。

学生たちは 2 人 1 組のグループを作り、それぞれ対象となる入居者のためのお弁当を作る。

図2 「お弁当プロジェクト」の過程



学生たちは日本のお弁当文化についての知識を得るため、お弁当の起源が太古の時代に狩猟のために持って行った食べ物に由来し、それから干粥、おにぎりと発展していったことなど、お弁当の歴史を自分たちで調べる。幕の内弁当、キャラ弁、ほかほか弁当、松花堂弁当、助六弁当、腰弁、日の丸弁当、コンビニ弁当、駅弁、空弁などを調べ、日本のお弁当文化の特徴、お弁当を作る際の要件や気をつける点などを調査する。日本のコマーシャルや「サラメシ」などのテレビ番組を見たり、本や新聞、雑誌記事、インターネット上のブログ記事を読んだりし、調査する。和食の栄養バランスやお弁当箱、箸箱、お弁当の容器を捨てることとゴミの問題などグローバルな問題についても考える。

日本人はどのようなお弁当が好きか、お弁当の中には何を入れたらいいか、腐らないようにするためにはどのようにするか、彩りはどうするかなどを、実際に日本食を売っているスーパーを2軒訪れ、試食したり、お弁当を作っている人たちにインタビューしたりする。アメリカのランチボッ

クスやアメリカ人が食べる昼御飯などと比べて、日本人の昼食との異同を考え、背後にある文化的、社会的要因について考察する。また日本のお米がジャポニカ米であることが冷たくなってもおいしいお弁当を生み出す一つの理由になったことや冷たいものを食べないアジアの他の国の文化との違い、日本の主食、副食の独特の概念などについても研究する。

また、老人ホームに入っている人たちにアンケート調査をしたり、インタビューをしたりして、食べ物の好みを調べる。オンラインのサーバーサイトを作り、日本にいる人にもお弁当についての意見を聞く。以上の調査、研究をもとに、老人ホームに入っている人たちが喜ぶお弁当をデザインし、食材を買い、料理する。お弁当を入れる容器も日系の 100 均ショップで選び、彩りを考えて、詰める。

老人ホームにお弁当を持っていく前に、どのようにお弁当の内容を提示するか、老人たちの興味を引きつけるためにはどのような発表をしたらいいかをグループ内で考え、発表の担当などを決める。発表の後、老人と一緒にお弁当を食べ、老人にお弁当に関しての感想を聞く。

老人ホームでの発表が終わった後、老人たちからのフィードバックをもとに、自分たちのお弁当デザインの活動を評価する。次回同じようなプロジェクトを行う際に、より円滑にプロジェクトをするためにどのようにしたらいいかを考えるほか、プロジェクトを通して、自分の日本語の能力がどのように向上したかを内省する。プロジェクトを行う上で、日本語でうまく機能できたか、出来なかったとすると日本語のどのような能力をより改善する必要があるかなども内省する。自己の文化能力、グローバル社会能力の発展具体も内省する。自己評価のみならず、ペアグループ全体の評価、ペアとなったクラスメート同士の評価も行い、最終レポートを書く。

この一連の活動をすることにより、次のような能力を伸ばすことができた。

表3 「お弁当プロジェクト」で達成される目標

言語領域	わかる	お弁当、食品、食材に関する語彙を学ぶ 食べ物、食事に関連した表現を学ぶ
	できる	お弁当について説明する、話し合う お弁当について調べる、研究する インタビューする
	つながる	相手の意見をよく聞き、異なる意見との間の調整を行う 自分たちの作ったお弁当をアピールし、食べてもらう お弁当にメッセージを込め、自分の気持ちを伝える
文化領域	わかる	日本のお弁当の歴史を理解する 日本のお弁当文化、お弁当の特徴を理解し、そこに込められた工夫、人智、配慮を理解する お弁当の背景にある食文化（彩り、盛り付け、清潔さ）を理解する 栄養のバランスとそれを反映したお弁当を理解する
	できる	文化的要素を考慮して、適当なお弁当を作ることができる
	つながる	日本人の老人と文化、世代を超えてうまく交流ができる
グローバル社会領域	わかる	現在の日本のお弁当の需要から、日本の文化、社会について新たな気づき、発見をする 世界で問題になっている食糧問題、ゴミなどの環境問題を理解する。それらに対して、自分は何ができるかを考える 日本の食糧自給問題について理解する 日本の少子高齢化について考え、老人のために何ができるかを考える
	できる	老人のためによいお弁当をいろいろな思考能力を使ってデザインできる 創造力を使い、魅力的なお弁当を作る 協働作業をすることができる グループの中で、自ら率先して行動したり、リーダーとしてグループメンバーを率いたりする 調査、研究でテクノロジー、インターネットを駆使する 発表の際に使うメディアを工夫する
	つながる	老人のためのお弁当をデザインすることにやり、社会のつながりを認識し、自分がどのように社会問題解決に貢献できるかを考え、今後の生活で実践できるようにする

学習者の関心、意欲、態度、 学習スタイル	協働作業の中で、それぞれの学生が得意な部分を担 当する 協働で何かを作り上げる達成感を実感する
他教科の内容、既習内容	日本の歴史の知識を利用し、お弁当がどのように生 まれ、発展してきたかを学ぶ 栄養素、栄養のバランスに関する知識を利用する 環境問題に関する知識を利用する これまで習った表現、語彙を駆使する
クラス外の人、モノ、情報と のつながり	老人ホームの入居者と交流する 異なる年代、異なる背景を持った人たちと交流する インターネット上の情報を活用する 日本のスーパー、100均ショップなどを訪れ、店員 やお弁当を作っている人たちと交流する

日本語を使い、このプロジェクトを行うことにより、12の目標が達成でき、SNAの言う総合的コミュニケーション能力が発達していく。

5. おわりに

以上、SNAについて説明してきた。21世紀という複雑な社会で言語を効果的に学び、さらに学んだ能力を有意義に使い、社会に貢献していくことができる人間を作る言語教育のアプローチである。グローバル化が進む中、教育も変化する必要がある時代である。これまでの文法・語彙を憶え、それを使えるようにする言語教育は、人間の教師がいなくてもできるような時代になりつつある。人間である教師を必要とする言語教育とは何かを考えて、言語教育をデザインし、実施すべき時代が来たように思う。

参考文献

- 當作靖彦、中野佳代子（2012, 2013）『外国語学習のめやす：高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』国際文化フォーラム
- 當作靖彦（2014）『NIPPON 3.0の処方箋』講談社
- 當作靖彦（In preparation）『グローバル時代のつながる言語教育: ソーシャルネットワークワーキングアプローチの理論と実践』

- 中野佳代子 (Unpublished) 『JS-Forum: ASEAN と日本をつなげるにほんご人フォーラム』
- Cowen, Tyler. (2013). *The Average is Over: Powering America Beyond the Age of the Great Stagnation*. New York: Dulton Adult.
- McDermott, John (ed.). (1981). *The Philosophy of John Dewey*. Chicago: University of Chicago Press.
- Miller, Richard. (2005). *Writing at the End of the World*. Pittsburgh: Pittsburgh University Press.
- Rychen, D.S. & Salganik, L.H. (Eds.). (2003). *Key Competencies for a Successful Life and Well-Functioning Society*. Gottingen: Hogrete and Huber.
- Stiehm, Judith Hicks & Townsend, Nicholas W. (2002). *The U.S. Army War College: Military Education in a Democracy*. Philadelphia: Temple University Press.
- The Partnership for the 21st Century Skills. (2002). *The 21st Century Skills*. Washington, D.C.: The Partnership for the 21st Century Skills.
- World Economic Forum. (2015). *New Vision for Education*. Geneva: World Economic Forum.